

## ニュージーランド 赤肉系キウイフルーツの課題に取り組む

[FreshPlaza 2025年3月13日](#)

### ルビーレッド・キウイフルーツは需要が増加する中で数量が2倍に

ニュージーランドでは赤肉系品種に対する消費者の関心が高まるにつれて、ルビーレッド(RubyRed)キウイフルーツの出荷量が倍増すると予測されている。ゼスプリとキウイフルーツ育種センターは、果実のサイズが小さい、収量が少ない、PSA(キウイフルーツかいよう病)にかかりやすいなどの生産者が直面している課題に取り組んでいる。20年以上にわたって開発が進められてきたこの品種は市場で好評を得ているが、保存期間が短いため、遠方地域への輸出に影響を及ぼしている。

テプケ町(バイオブレンティ地方)にあるキウイフルーツ育種センターは、植物・食品研究機構とゼスプリが共同で所有しており、これらの問題の克服に注力している。同センターの商業化の最高責任者であるバート・チャリス博士は、サンゴールド品種とは異なり、ルビーレッドは複数の栽培品種に進化する可能性があると指摘し、「我々は栽培品種の候補を常に持っており、さらに多くの赤肉系品種からの選抜によって段階的な改良を行っている」と述べた。

ゼスプリのCEOであるジェイソン・テ・プレーキ氏は、11月にルビーレッドに対する同社のコミットメントを改めて表明し、サイズと貯蔵性の課題を認識していることを示した。同氏は進行中の新しい栽培品種 - 2年以内に商業的に利用できるようになって出荷と小売の期間を8週間以上延長する可能性がある - の試験について言及した。

チャリス氏は、2010年にPSAが発生したため、より強力なPSA耐性を組み込むために育種計画の見直しが必要となり、ルビーレッドのリリースが遅れたと説明した。ゼスプリの生産者・業界担当であるトレイシー・マッカーシー氏は、抵抗性の改善に当たって、ほ場や、日照や風から守られた区画が重要であると強調した。同氏は、「生産者達と協力して、Red19(ルビーレッド)でうまく機能する多くの管理ツールを開発した」と述べた。

ルビーレッドのPSA耐性は、競合品種よりも進歩していると報告されている。一方、ゼスプリは5年間の見直し計画の発表まで、新規の栽培面積ライセンスの発行を一時的に停止している。生産者、消費者、及び流通経路のニーズを満たすように品種のバランスをとることが、引き続き優先事項である。チャリス氏は、「流通経路の要素は、市場までの距離が長いニュージーランドに特徴的な問題である」と述べた。

CA貯蔵は収益性に影響を与えるが、ゼスプリの北半球におけるグローバル供給契約は、距離の課題を軽減する可能性がある。生産者は、サンゴールドやグリーンと比較してルビーレッドのサイズが小さいことに懸念を表明している。チャリス氏は、新しい品種の商業化前の試験により、サイズの可能性が明らかになると予想している。

ゼスプリと育種センターは、遺伝子組換えではなく精密育種技術を支援している。チャリス氏は、25年の育種サイクルを考えると、この技術は迅速な解決策ではないと指摘している。ルビーレッドが生産量の面で苦戦しているという主張もあるが、ファーマーズウィークリー誌は一部の生産者が1ヘクタール当たり1万3千箱以上を達成したと報告している。

世界的には、中国をはじめとして5万ヘクタール以上の赤肉のキウイフルーツが栽培されている。チャリス氏は、「ルビーレッドは世界的な競争にもかかわらず、非常に優れたプレミアムを獲得している」と述べた。

出典: [Farmers Weekly](#)